



川下の中沢宅の塀の内側に標示板が設置されている

# 深くぬかるむ泥炭湿地を 暗渠排水でみごとに美田に変えた

## 泥炭低湿地での苦勞

川下地区は、明治17年(1884)に入植したのが最初で、入植者の大部分は長野県人なので「信州開墾地」と呼ばれた。

明治23年(1890)には19戸になっていたが、泥炭の低湿地のため、厚別川沿いの自然堤防が唯一の道路だった。明治38年(1905)には北郷へ通じる道路(今の北郷中央線・白石北簡易郵便局前から北郷橋の通り)が、また大正3年(1914)には雁来へ抜ける道路(当時蛇行していた厚別川筋)ができ、昭和7年(1932)の町村制施行後は白石村大字白石字厚別川下となった。

この地域は高位泥炭地のため、秋になっても水は抜けず、稲刈りは膝までぬかりながらひと足ひと足運んでの作業だった。後で暗渠排水を生み出す中澤八太郎は板の中ほどに2つの穴を開け、縄を通して足にしっかり結び付け、いわゆる「下駄」をつけて、せっせと稲刈りをしていた。

## 明治26年長野県から入植

中澤八太郎は安政元年(1854)9月、長野県有賀村で農業を営む中澤彦次郎の長男として生まれたが、明治24年(1891・37歳)から26年にわたる諏訪湖

の氾濫、その上の養蚕の生育不良で農家の人たちは疲れ果てた。ついに26年4月7日、故郷の人たちと北海道へ渡り、5月に知人を頼って厚別に入植した。半墾地1 $\text{㌥}$ を22円で買い、両親と3人で将来を夢見て開拓に励んだが、間もなく母ソデを病気で失った。

明治33年(1900)には川下に1.3 $\text{㌥}$ の土地を600円の借金で買い、いつしか数人の小作を擁するほどになり、この地方有数の農家に成長した。

## 暗渠排水で収量が増加

八太郎は付近の地勢と厚別川の水利の便をみて、この地が必ず水田地帯となると確信し、明治26年(1893)に率先して試作田を造成した。しかし前述のような身を没する田の状態なので、排水施設の必要を痛感した。故郷の桑畑で使われていた通称「水道」という暗渠排水を思い立ち、有賀村から用具として平鍬、鋤簾(柄の先に箕を取り付け、土砂や小石をかき寄せせる道具)などを取り寄せ、明治28年(1895)から2年をかけて約1 $\text{㌥}$ の水田に暗渠排水を行った。

水田の中に20 $\text{㌥}$ 間隔に幅40 $\text{㌥}$ 、深さ1 $\text{㌥}$ の4筋の深い溝を通し、その底にさらに細く深い幅15 $\text{㌥}$ 、深さ30 $\text{㌥}$ の溝を



掘り、その上にナラやトドマツの割り板で蓋をし、その上に枯れたアシ、カヤ、雑草などをかぶせ、土をかけてもとどおりにした。

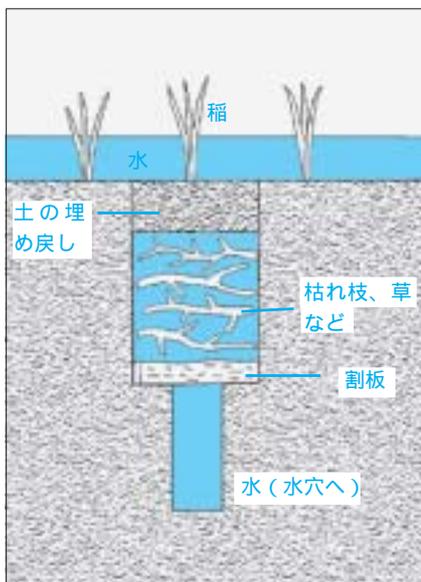
その最下流部に水穴(落ち口)を設けた。そのおかげで水田操作がしやすくなり、米の質も向上し、泥炭地特有の赤サビ色も少しずつ消えていった。10畝あたり収量も60<sup>キ</sup>ogramから90<sup>キ</sup>ogramになった。

**暗渠は全道に普及**

やがてこの「水抜き」といわれる暗渠排水が全道に普及した。その功績が認められて昭和16年(1941)6月、北海道土工組合連合会から「暗渠排水発祥の地」と認定され、昭和19年5月、記念仮標が八太郎所有の水田に建てられた。なお今日、記念碑は中澤敏弘邸内に氏の費用で建てられている。

この間、八太郎は米の改良にも努め、明治39年には大野村から取り寄せて優良稻を選別して良質の新品種を開発した。うるち米では「中澤白毛」、もち米では味も収量でも優秀な「厚別もち」が有名になった。

(塩見一釜)



暗渠排水の構造



暗渠排水の作業風景



中澤八太郎の暗渠排水のおかげで厚別川流域は見渡す限りの水田になった(昭和23年頃米軍撮影の航空写真)